

光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家

編集／光の子 編集委員会

〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277

TEL／0480-72-3883

振替 東京3-128022

印刷 (株)ドモン企画



あけまして
おめでとう
ございます

光はやみに輝く

ヨハネ一・三

理事長 福島 勲

たいていの宗教は、何らかの形で光と関わっている。その主神や教祖の権威や恵み、また慈悲などを光に表現し、光に託して語り、それを讃え、敬い感謝している。

南方仏教の最古の教典といわれる、スッタ・ニパータには釈迦を諸人のためにたいまつをかざす人と呼んでいる。日本の神話にも神の戸隠れて世界が暗くなったとあり、また偉人の誕生にも太陽が関係するなど、多くの例をみる。

キリスト教も例外ではない。むしろ最も多く、強く光と関わっている。

聖書の開巻第一に、神が光あれといわれて光があり昼となったとある。この昼と夜とが、生命と死、善と悪に展開していく。

ヨハネ福音書ではキリストがすべての人を照らすことの光である。この光が世にきた、という。

パウロはこれを、キリストは富んでおられたのに、あなたがたの

ために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである。(第Ⅱコリハ・九) といって人となられたイエスと救いについて論及する。不敬虔、殺人、姦淫、盗み、偽証、人に施すことなくむさばり奪う、このくらやみの中にキリストは人となられた。

人となられたキリストの苦難の十字架こそ、最も貧しい姿である。この貧しい姿に限りない救いの恵みが潜んでいる。

信じる者が救われる。神の生命を与えられる。これこそ人間の最も富める姿である。

イエスは、こころの貧しい人たちは幸いである。天国は彼らのものであるといわれる。

(マタイ五・三)

日暮 荒村の路

復た空を掲げて帰る

良寛の詩の一句である。托鉢に出て、夕暮にからっぽの盆をかか

えて山寺へ帰ってくる。

出雲崎近くの寒村で、だれも施しをしてくれる者がなかった。

しかし、無慈悲と思われる村人を責めているとは思えない。

良寛は自ら僧侶であることの意義を問いつつ、孤独と貧しさの中に仏の慈悲に徹しようとする。

空腹をかかえて夜着をかふる。寝つかれない夜、彼の魂は豊かさを増すのであろう。

キリストを知るわれわれの心もこの世のものでは満たされない空虚なものであった。寒空に飢えてふるふる身であった。

この貧しさこそ、キリストに捕らえられる富への転換であった。あらゆる面で貧しさの中にある子どもたちと共にクリスマスを守るとき、キリストの貧しさが、まことの豊かさであることを、いささかなりともわかってもらいたいものである。

キリストの恵みの光が、かげりなく子どもたちの心を照らし、光の子ともらしく、明るく誠実に、そして敬虔な子どもに成長してほしいものと念願する。

二度目の新年を迎え

施設長 今関 公雄

当地で二年目のクリスマスと新年を迎えることができました。このまじりと十名の幼児さんとの昨年に比べ、今年は約三倍の二八名で随分と賑やかになりました。

四年生三名を頭に、小学生八名二年保育の幼稚園児二名、二、三歳児九名と多様な年齢構成になりました。丁度一年前、学童入所の理解を求め、地元の有識者たちを走り回っていたことを思うと、隔世の感があります。

そこで、子どもたちの近況報告を致します。

小学生について。通学している原道小学校は、一学年一クラスの規模校で、子どもたちは、六年間同じ仲間として育ち合う環境にあります。光の子どもは、学区の東端に位置し、子どもたちは、二kmの田圃道を、約四〇分かけて通学しています。六時には朝ごはんを食べ始め、六時五〇分には登校の毎日です。厳しい赤城風

が吹きすさぶなかを、ヨイ・ドなど元氣いっぱい駆けていきます。

また、開設反対の主な理由とされた高学年児の非行化という偏見が一部に残っていて、最年長が四年生のままなのが残念ですが、この九ヶ月間を無事に学校生活を楽しめたことは感謝しております。当初、心配された施設児童による「いじめ」などの教育環境の悪化は、ほぼ杞憂と言ってよいでしょう。環境や状況を考えると施設の子どもたちにとって、友人関係づくりの困難性や学力の遅れなどが当面の課題といえます。この課題の克服は非常に困難であり、学校の協力を仰ぎながら、懸命に努力を続けています。地域の子とも会活動にも大いに参加し、最近では子どもに学友たちが遊びに来るようになり、また招かれて同回数も増えつつあります。

幼稚園児について。毎朝八時半、

この町唯一の幼稚園に向けて、賑やか過ぎる子どもたちの歓声を乗せて五一年型タウンエースが走り出して、光の子どもたちの家職員たちはホッとします。幼児期の情操と社会性の発達の促進は、特に施設児には不可欠です。年長の五名は、小学校入学が目前です。

家に残った子どもたちは、保育園での長い経験とゆつたりした人格の鎌田さん、養護施設の経験と素敵なセンスの田中ママの二人が午前の施設内保育をしてくれます。武蔵野のおもかけを今にする日和を散策する親子のような風景や、園庭の砂場に沸き返る笑い声のなかで、子どもたちは育ちつつあります。

普通の家庭の暮らしに限りなく近づけていくこの働きの最終目標は、彼ら自身による社会的自立であります。「家なく、親なく、学歴なく」と言われる養護施設の子ともたちの「自立」へむけて、更なる内容の充実が必要となります。今年も「敬神奉仕」の心で、子どもたちの人間形成に当たる思いを新たに歩み始めます。

エッセイ どうしようもない

落合 水尾 (『浮野』主宰)

昨年九月二十六日、朝、一老人が鎌倉二階堂の家を去った。薄紅葉にさす日差しに誘われるようにして八十歳の白髪の老人が家を出た。

奥さんの、しっかりとした愛情のもと、誰にも苦にされない、悠々自適の老後を過ごされていたが老人性痴呆症の二病は、思いがけない早さで進行、家庭崩壊の不運を来してしまつた。常に身近にあって支えになっていた奥さんの苦悩を思うに、傷みにたえない。

話しかけても何の応答もなく、ベッドの端に腰掛けて、思い出しただけ、独り言をつぶやいてはただ、何かの思いにとらわれて一途に石のようになつていた孤影。建長寺の須弥壇に駆け登ろうとして、注意をきこうともしなかった狂気。貰い受けた壺のいきさつも、こうと信じたら譲らず、執拗なまでに夢想に縛られていた他に対する不信感。

そのような不可解な出来事が、

日常生活の中に、うねりのように現れ、人の心を暗くさせたのである。そして、庭にやってくる野鳥に餌を用意する余裕も、優しさもいつの間にか一老人の生活意識から消えて、なくなつていった。

家を離れて、油井が浜に近い、妹さんの所を尋ねるのが楽しみであつた。心音が昔にもどる安らぎを得るのを喜びとされていたが、それも、帰りの道は不案内で奥さんの迎えを待っては、自宅に帰ることを繰り返したのであつた。

二人で海を見ては心を広くし、鎌倉の整った小路に懐かしさを覚えては、心を明るくして帰つたのであるが、神経の硬直は、日を重ねて深まっていた。

家を出た当日の朝も、起きぬけに、奥さんに対して、「あなたはどちらのどなたでしたか。」と、真顔で言われたそう。忘却の度合も極に達しているように思われた。が、御愛嬌とも思われて、さ

りげなく時の流れ待たれたのであつた。レインコートを着て、家の中をふらふらと落着きなく歩いていくのも気になり、「家の中でずから、レインコートは脱いだら。」と声を掛けて、仏壇に向かつて朝のおつとめを行じた。そのほんの五分、うらの間に一老人の姿がみえなくなつてしまつていった。

玄関には、ぬいだレインコートが置いてあり、いつもの大きな黒靴ははいて出たと見えて、どこにも見当たらない。

早速、八方手を尽くして探したが、独りの力には限界があつた。近親者や隣近所のご協力を素早く得て、対応できなかったことも、不運であつた。妹さんの所に立ち寄つたらしいという情報をつかん

だが、生憎、妹さんが前の日から旅行に出ていて留守であつたので寄り着く島はなく、最悪な状態を思わないわけにはいかなかった。鎌倉の山や海に捜索の手はひろがった。人さがしのビラを貼ることに、市や警察署の広報活動の応援をいただくこと、俳句仲間の山狩り奉仕を受けること、新聞広告を

出すこと、そして、易者にも見ていただくこと等、出来る限りの手だてを尽くしたが、一報さえもない。

長袖のシャツの上に半袖のシャツを二枚重ねただけの軽装で出られたが、いつしか紅葉の季節も過ぎ、山に雪を見、野に霜を見る今、ご老体の上に異変がなければよいがと案じられる。

「今死んだ。どこへも行かぬ。ここに居る。たずねはするな。ものは言わぬぞ。」との一休禪師の言が胸奥にわき起こる。

どうにもならない暗黒の状況だが、それでもなお、万が一の朗報が神仏の加護のもと、かなえられるものであることを、祈つて待つ。この愛のともし火を、同行二人の前方に高く掲げたい。

心を尽くした師弟の絆に、一方的な別れなどあるはずはないと信ずるからである。

どうしようもないわたしは、歩いてゐる

山頭火

現場から

育ちゆく子らと 6

秋元 光代

十一月十五日、太郎君の七五三のお祝いの日である。と言っても明日教会で祝福式をしていただくので、正確には太郎君の七五三は明日である。でも、この日、生まれて初めて、羽織袴の盛装をさせてもらった太郎君にすれば、やはり、今日も特別な日であり、七五三なのだろうと思います。初めての羽織袴に、みんなの目を意識して、照れてしまい、床に顔を伏せて中々起き上がってくれず、とうとう床に伏せた太郎君の記念写真となってしまいました。

この羽織袴の晴れ着は、鎌田さんが、お孫さんのものを貸してくださいました。羽織も袴も見るとさえ初めてのことで、子ども心にも、何かこの日は特別なことがあるのだらうと思ったのでしよう。興味深げに、ニコニコしながら袖通しはじめたのでした。あっちこっち見ている上機嫌で、「ち

やんと前を向いて」と、何度も注意されての着付けでした。やっと袴をつけたとたん、サッと表情がかわり、いじけたようになり「光代さんのいじわるウ」を連発しながらたたきはじめたのです。これには少なからずおどろきました。

いつもとは違うものが着れて、とても「かっこいい」のだが、妙に照れ臭くてどうしようもなくなっていました。それで、私に八つ当たりをしはじめたのでした。「太郎君、似合うよ。とっても素敵」。「いいなあ」。「カッコいい」。私の回りの子どもたちも口々に言い出し、すっかりその気になった太郎君は自分を「素敵」に思い始めてしまいました。明日のために着付けの練習のつもりが、これで燃れてしまい、明日着てくれないかもしれないので、写真を撮ってもうこのにして、一歩家の玄関をでたとたん、究極の照れやさん。もう一人て歩けません。

ダッコして食堂までつれて行く途中、遊んでいた子どもたちが寄ってきて、「太郎君どうしたの」。「七五三なのよ」「ふーん、カッコいいな」。どこでも、太郎君にとって最高の誉め言葉です。皆にほめられて、すっかりあがってしまい、照れて、恥ずかしくて、顔を伏せ、叩きつけられてうつ伏せに延びてしまった蛙のように、床に匍いづくはってしまった太郎君でした。この羽織袴のおかげでとても思っていた七五三になった、とてもデリケートな太郎君。太郎君は、このごろ「地球」とその「歴史」に興味を持ち始めています。いつか見たプラネタリウムが印象に刻まれていて、「地球見たよ」と時々口にします。地球と言ふ言葉に何か神秘的なものを感しているのかなと思われまふ。夕方、白い月を「アツ地球だ」。いくら教えても、自分がいまだ踏みつけて、住んでいるのが地球だとは理解できません。地球やその他の天体が丸いものであり、様々な色があることを知っています。

百科事典で恐竜を見ながら、「これ、やさしい恐竜だよ。怖くないよ。草を食べるんだから」。と説明してくれます。恐竜がエサをたべている絵をどこかで見ただけでしょう。もしかしら、おうちで生活している唯一人の兄弟であるオニチャンに教えてもらったのかも知れません。そのオニチャンからも、もう半年も連絡がない太郎君である。

「人間は昔、魚だったんだってノアが君が言ったよ」と職員を君づけて、堂々と他の子どもたちにも教えているV太郎君。だんだん世界が広がっていきます。

現場から

光の子らしく 5

岩崎 まり子

ここへ来たての頃のS君は、ちよつと油断すると肥満の域に入っでしまいそうな体型でした。

そして現在、摂取量より消費量が上回り、意欲薄弱で、とり合えず食べてしまう担当母を尻目に、見事ダイエットを成功させました。

これは、S君が、何にでも積極的に取り組み、動くことを厭わなかった結果だと思えますが、明るく振る舞いながら、心の奥の奥で人知れず考え、悩み、行動していく習慣のようなものが身についているのも、大きな理由と思われる。

彼の口癖になっていた「ウッソ」「ネ、それホント?」は、時には相手をイラださせる。ある晩菅原先生に少々きつめに指摘されてからは、パツパツとそれを言わなくなり、きつと彼なりに悩んで決心したことでしょう。

自分の親についても、大人に向かって一言も言わないS君です。親への思いは、妹と同じく

強くありながら、妹ほど無邪気にそれを表現できないその思いの複雑さ。彼自身も整理しきれないのだらうと思われ、私などには察するに余りあることなのでしよう。

11月29日S君の担任の先生から電話がありました。「小さい頃の写真や作文等ありましたら、国語の教材に使いますので・」。

その日S君が持ち帰った宿題は自分の生まれた時の様子を家の人に聞いて書く、聞き取りカード。「大丈夫。僕、お父さんやお母さん、おばあちゃんに聞いてわかってるから」と、机に向かってせっせと書き込み続けるS君。

翌朝、見せてもらうと、「生まれた時の体重・二九〇g」と書いてあったのです。改めて自分の無力さを実感させられ、自分に対して、腹立たしさを感しました。——S君は今、哀しみさえも私たちに表現す

とができずにいるのだ——。

自分の内にあるものは勿論、ないものでも、とにかく自分のいいところを、プラスだけをアピールしてくるS君。そうしなければ評価されるたり認められたりされなかったこれまでの生活環境。「いいところも、悪いところも全部ひっくるめたS君と一緒に生活しているんだよ」と折にふれて、分かり易く言葉を選んで話す。俯いて頷くけれど、同じことの繰り返しこのこれまででした。お互いに分かりあい、認めあい、信頼して真実を語り合う日は、いつのことでしょう。これから先、何時のことかも分からないあてのないVその日Vへ向かつての一日はとてつもなく長く思えます。

けれど、一日いちにち一緒に暮らしていくしかありません。

少しでも長く、そして深く、少なくとも私の方からは逃げないように子どもとの時間を創っていきたいと思います。

そして願います。

人の心に敏感なS君、どうぞ、それにひとを思いやれる強さが備

わりますように、どうぞ……。

何故なら、強くなければ自分の親を凝視め、認め、自分を含めて愛することができないと思うからです。しかし、強さのメジャーはありませんし、私自らも訓練されるべき者、言うだけ、書くだけでなく、何もプログラムできていません。

でも、時は待ってくれません。S君が、自分の親について語りはじめるときが、親を凝視して、乗り越え始めるときです。「そのとき」の為に、私はできる限りのくさんのつたえられる何かを準備しておきたいと思います。そして、何よりも私がしなければならぬことは、S君を迎えるVそのときVを共有させてもらえようとな私になつていくことです。

S君は、間もなく大事な青春期に突入します。



採
光
Y
君

山崎 智子

10月のある土曜日、私は朝から担当している子どもの誕生日のお祝いの準備にかかっていました。久しぶりに焼くチーズケーキの火加減を気にしながら、何気なく新聞をめくり……

社会面の片隅の写真に「見覚えのある顔だな」と思っただけで、瞬間に「あつ」と声を上げてしまいました。

「知恵遅れの長男殺す」「母逮捕」というショッキングな見出しの記事は、九歳の男の子の養育に思い悩んだ母親が犯行に及び、母親自身が一一〇番し逮捕された」と報じていました。

「Y君」——
私が養護施設の保母として勤務して、初めてその入所からかわった子ども、まさしくその子なのでした。二歳のお誕生日を迎えて間もないY君は、「精神薄弱」「白内障」判定結果と診断を背負って、その足よりも危なげでした。

白内障の両眼を幾度も手術をした後、多くの問題を抱えているお家へ、年取った養父の強い要請で帰っていきました。その後、若すぎるお母さんから度々相談も愚痴もつかない電話があり、家庭訪問もふくめ、そのつど対応してきました。行政区域が県単位であることから、Y君の養育や家族関係についてなど、試行錯誤を続けるお母さんに直接的には、働きかけにくい状況でした。

思い余った母親が、Y君を駅ホームに置き去りにして、大きく報道されたこともあり、人々との関わり、まして人様のお子さんを育てることは、仕事として割り切れず、私的な、生き方そのものにも関わることで、単なる理論だけでも、感情に流されても、全体を見通せません。私的な関わりを重視する一方、冷静に判断しなければなりません。

Y君親子のことからは、私自身

の存続に迫り続けます。

その養護施設を退職した私は、気がしながらも連絡が途絶えたまま現在に至っています。仕事を退くことは、Y君親子から心も乖離するとは思いません。しかしこの間、なに一つ関わることもなく過ぎてしまいました。

「人と関わること」「子どもとともに、生活を送ること」を、今改めて問いだしています。

この夏より、再び養護施設である光の子どもの家へ縁があつて生活しています。この子どもたちとの生活に、懸命に向かい合っているつもりは、事件そのものによって、自分の存在と生き方そのものを問われる衝撃を与えられました。

せつば詰まった状況のなかで、何にも変えることができない存在であるべき親子が、殺し、殺されるという最悪の事態に落ちていたことに、その親子の両者に関わってなすべさえ無かった私への問い掛けは、終わることはありません。

いまここで、クリスマスを目

に、子どもたちは、毎晩アドベント・カレンダーの三十番目をめくることを楽しみにしています。

子どもの心に残る素敵なクリスマスをお願いながら準備を始め、「私のクリスマス」をどう迎え、どう過ごすのかを思案しています。

光の子どもの家の今年のクリスマスの主題は、内なる自己を見つめようといひかけます。そんななかで、これまでを省み、これからの方を、もう一度、考えていきたいと思っています。

「常に、人間に対して、ヒューマンな目をそそぐ。ひとりひとりが、変わり、集団が変わっていく可能性を信じる。勿論ただ信じるのではない。多くの実践を通じて、能力の発達の可能性、人格の発展可能性を、実際に確かめながら、つまり、科学的にうら打ちされた、人間に対する確信と信頼を大切にしよう」私の好きな一文です。

遠くに行ってしまったY君には届きません。

養護メモ 9

平和をつくり出す人々は……

菅原 哲男

養護施設光のこどもの家は、多くの場合、家庭で家族が分かれて反目し、修正不能になるまで破綻した人間関係の、分散崩壊していく過程のなかで、誰もが負たくない、マイナスの存在としてしか評価されなくなった子どもたちが、信頼しあい、いっしょにみあいがら暮らし、安心して育ちあう場となることを願って建てられた。

法人設立以来続いてきた、不可抗力の退職（病気）を除いた退職者ゼロは今年度末に終止する。

昨春秋、求職希望者が数名訪れた。人事に関する業務をいやがうえにもしなければならなかった。

初年度の職員は、志を同じくする者たちと、新卒者は社会福祉専門職養成校に、知り合いて信頼できる教職者に依頼して、各校一名の学校推薦をもとめ、相当の理由がない場合これを採用することとして草創の有志を集めた。この仕事はまさしく人によってなされるもの

であり、その人となり判断することの不遜と困難と人への猜疑を避けたかったからである。若干の書類審査と、面接によって私たちの願いと方向を説明するという最も簡単な手だてによって、誠実に実行力に富み、個性的で優秀な得難い同志を仲間につけた。

どんなことがあっても、誰とも何をしても代えられないことのない関係であるべき家族関係から離れ、とりわけ親子関係そのものから外されて、安心して甘え、溢れるような愛のなかで、ねんごろに育てられなければ壊れてしまふような、二歳からの子どもたちが養護施設に入所してこる。

このよき子どもたちに、家族に代わって関わり、それこそ、フツの家庭により近い生活のなかで、失われ、壊された人間関係を回復し、発展させていく。A家庭の処遇を私たちはめざしている。一般的に、家族関係の特質の一

つは永続的であることである。

時々お父さんやお母さんが異う人に替わってしまったら、当人たちはどうでも、子どもは困惑するだろう。前述のように、誰とも何をしても代わり得ない関係こそが、子どもが育っていく上で、重要な要因なのである。お兄さんや妹が、年度によって、あるいは学期によってクルクルかわるような部屋替えは、原則として私たちはしない。A親子として私に関わる職員、とりわけ担当者の変更も同じことであり、責任感や力量を問うに甘い施設職員が逃げ込み、子どもを施設のたらい回しにする措置変更など論外である。

ミスマッチということがある。人との関わりが何時でも、全てプラスではあり得ない。非常に悪化することもある。これは、乗り超えるための訓練ととらえたい。

人が全的に善ではあり得ないが、全部が悪だということもない。全的に悪でありたいとは誰も願わないが、出来ることならば善でありたいと望めるのである。ここに希望がある。田中郁夫は述懐す

る。「不遜な自分が嫌になる。人に対し、苛だち、腹をたてる自分は「何様」なんだろ？」と。「私が担当でなかったら、この子どもたちは、きっと、もつともつとよい関係を経験できたろう」と竹花信恵が嘆息する。ミスマッチは多くの場合、関わる側の問題として引き受けるべきである。

Yが「自分をもつと必要としている人や場所が他にないように思う。」と、暗くもない表情で辞意を表明してきた。

Zが「家の事情がのびきならなくなっちゃった。始まったばかりのWちゃんとの関わりが……」と、泣いてこれも辞意を告げた。

施設の限界をつきつけられた。次から次へ、何人もの人に抱かれ、変わらない人との関わりを経験し得ない子どもたちを不憫に思った。せめて五年ぐらいいは……

人のすることに完全はない。しかし、家族に完全に代わることをめざしたい。子どもたちが、かた時も忘れることのない親たちとの関係は、決して時間的長短では計れない。A親子でもあるのだから。

日誌抄スぺシャル

一九八六年十一月三日午後二時、北埼玉郡大利根町の社会福祉法人光の子どもの家の、第二回感謝の集い、創立一周年を祝う会が八十余名の参加者を集め、おだやかな秋晴れのなかで盛大に行われました。

日誌抄スペシャルでその折の様子を報告し、喜びの雰囲気なりともご一緒し、次の跳躍の糧にしたいと願っています。

開設当初は、ためにするデマが意図的に流され、異様に膨れ上がった地元の開設反対運動のうねりのなかで、施設落成・開設のお祝いなどとてもできませんでした。

報道人のきらめく良識によって全国から集められた多くの支援者。私たちの願いを、時の流れのなかで感じとって下さった地域の力強い理解者の皆さん。そんな環境の著しい変化、などから、やっと迎えることのできた創立一周年を、第二回・感謝の集いとして、ご心配をかけ、お世話になった関係者、強力にご支援、お祈りいただいた皆さんに、施設をお披露目し、子どもたち共々感謝したいという集まりの趣旨でした。

第一部・感謝礼拝は、福島勲猷窪教会多喜牧師によって「光の子らしく歩きなさい」とのお勧めがあり、感謝の祈りが捧げられました。青木正久衆議院議員をはじめ三八名の出席をいただき厳粛に行われました。

第二部・祝会は、今開設長の感謝を込めた経過報告。江森勝男大利根町町長、富岡重利・埼玉県児童福祉課課長による、晴れがましいお祝いの言葉と丁寧なねぎらいまでいただきました。

埼玉県養護施設の中での指導的なお働きと、当法人設立計画当初から指導、ご助力をいただいた山崎まさの・子供の町園長先生の乾杯によって祝宴は、おおいに盛り

り上がりました。野外に設えられた十脚のテーブルには、職員たちが夜を徹して作ったお料理を囲む関根同仁学院理事長先生などの懐かしい顔、矢野文伝さんなど熱烈に支援でも初めての顔、町会議長や議員さん、職人さんたちなど。お祝やお励ましの言葉も次々に、園庭が夕日に輝く頃まで宴は果てず、祝電も田中正己参議院議員、自見庄三郎、奥野誠亮衆議院議員、小野倉蔵全養協会長、間庭達雄熊谷児相所長、細川律雄弁護士各位などから寄せられました。子どもたちも、少し神妙にお利口で、町長さんに抱っこ、児童福祉課長さんに頭をなでられて機嫌でした。

なお、参加されなかった阿部志郎明治学院理事長、加藤田政己中心学園長、豊福義彦和泉短大教授、弘中淳一郎弁護士、中野茂夫妻、岩崎美枝子、落水水尾、永作火童増田政一設計士各位をはじめ六九名の方々から、お祝いやお励ましお言葉、お心づかいをいただきました。こんなに沢山の山の人々に囲まれて感謝と共に地道に歩みます。ありがとうございます。(く)

反射光

輝かしい一九八七年を皆さんと共に
お慶び申し上げます

☆記念すべき創立一周年の祝典を日誌抄で特集しました。業務日誌にぎっしり記録されている一つひとつを報告し、皆さんとの連帯を願ひ、いろいろ手だてを考えていきます☆採光欄の山崎の報告と思ひは、私たちの仕事か自己完結し得ないことを明らかにします。Y君のケースに入所から現在も関わっている神奈川県の木原福祉社から、いつものご支援と「シヨックでした。Y君の母親から電話相談を受けた数日後にあの事件でした。仕事への適性を疑ってしまいました。終生忘れられません。」と便りがありました。☆十二月は浦和駅頭でボランティアの皆さんが募金に立ち、見知らぬ人々からご支援が。身も心もひきしまり、私たちの誠意が問われます☆素敵なクリスマス、楽しいお正月を子どもたちにと大奮闘の職員たちでした☆そして、新年度へ向けて走り始めます。皆さんのご支援ご祈りとまなびしを受けながら。(哲)